神に殺された異使徒

虚鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神に殺された異使徒

【Ｎコード】
Ｎ７６３３Ｘ

【作者名】
虚鏡

【あらすじ】
クロウリーを仲間に加えたクロス部隊、ティエドール部隊は、コムイの指令により、怪奇現象の起こる場所へとそれぞれ赴く。
任務地に訪れた一行の前に、一人の少年と、双子の兄弟が現れる。
彼らは語る。
自らの過去と、神の残酷さを――。

再び

憶えているのは炎の紅。
タタカエと、その声は、身体に容赦なく炎を燃え上がらせた。
ネムッテと、その声は、心を護るように炎で包み込んだ。
同じ声で、違う望み。
どっちが本当の望みか分からない。
もしかしたらどっちも望みなのかもしれない。
矛盾するその声の望みに、怒りと悲しみが湧いた。
その感情は果たして自分のものと言えるのか、わからない。
燃え滾る炎の中、見せられたのは、かつての映像(きおく)。
矛盾した望みは、中途半端に叶えられた。
死した自分は再び戦地へと舞い戻ったが、包まれた身体は未だに眠ったまま。
この地に縛られ動けぬ自分は、ただ祈るしかできない。

助けて、と。

再び（後書き）

また浮気しちゃってます虚鏡です。
まだ遊戯王の方もそんな進んでないのに新しいの書くとか、無謀。
でもでも書きたくなっちゃったんです。
仕方ないんだ！

この話ではデジモンは出ません。
でも設定はいただきます。
原作ではありえないイノセンス設定です。
二次って素晴らしい言葉！

とりあえずがんばります。
題名そのうち変更しそう・・・。

待ち人来る

「ここ、ですよね？」

森の入り口で、アレンは確認のために隣を見る。

「そうさ。ここがさっきコムイが言ってた、『炎の森』さ。名の通り、森から炎が燃え上がるんさ」

ラビはニカリと笑って答える。

「それにしては、燃えてないである」

クロウリーは、沈黙した森に首を傾げて疑問を口にする。

「報告によれば、森は人が入ってきた時に燃えるらしかったな、リナ嬢？」

クロウリーの疑問に答えるようにそう言ったのは、パンダみたいに目の周りを黒くメイクしているブックマン。

「ええ。一週間前、この森に入った人が炎に巻かれて、骨も残らず焼かれたの。その後も何人か焼かれて・・・」

そう言ってリナ嬢ことリナリーは目を伏せた。

「でも、それだけじゃないんですよね？」

そんなリナリーを慰めるように、アレンは明るい口調で尋ねる。

「・・・ええ。子どもが森に入った時も炎が上がったんだけど、その子は全くの無傷で帰ってきたのよ。その子が言うには、炎が怪我を治してくれたって」

その子どもは森に入る前日に刃物で腕を怪我したらしい。
友達とかくれんぼをしていて、隠れるために森に入ると、炎が腕を包んで、怪我を瞬く間に治したというのだ。

「死と癒しを与える炎、か・・・」
「イノセンスの可能性は高いな」
「でも、今までイノセンスが起こした奇怪で人が死んだことって、ありましたっけ？」

そこには新米エクソシストのクロウリー以外が沈黙した。
イノセンスは確かに怪奇を起こすが、そのどれも、人に対して危害といわれるようなことはあっても、死はなかったのだ。
それが今回に限って死人が出ている。

「・・・もしかしたら」

ふと、沈黙を破ったアレンに一同の視線が集まる。

「もしかしたら、焼かれた人たちは、ＡＫＵＭＡだったのかも」

それならば今までなかった死が出たことには納得がいく。
だがそれはあくまでも可能性の話だ。
それに、適合者がおらず真の力を発揮できないイノセンスがＡＫＵＭＡを倒すことが、果たして可能なのか。

「ま、ここでぐだぐだ悩んでても、仕方ないさ。全ての答えは、中に入って確かめようぜ」

ラビの言葉に皆頷き、森の中に足を踏み入れる。

「やっときた」

クスクスと、自分達を見ていた者には気付かずに。

待ち人来る（後書き）

さっそく題名変えました。
前とさして変わりませんが。

炎と少年

「不思議さ」
「不思議ね」
「不思議である」
「本当に不思議です」

ブックマンは無言だったがきっと同じ意見だろう。
森に入ったクロス部隊は、アレンを囲ってじっと左腕を凝視していた。
袖と手袋で隠された赤腕を渦巻くのは、紅い炎。

「熱くないんさ？」
「全く」
「服も燃えてないであるな」
「クロちゃん、それはちょっとズレてるさ」
「・・・ねえ」

燃える左腕から視線を上げたリナリーが、今度はアレンをじっと見つめる。
アレンはリナリーのもの言いたげな視線に小首を傾げて問う。

「どうかしましたか、リナリー？」
「左腕が燃えてるってことは・・・アレン君、左腕怪我してたの？」

その言葉に一同の視線が向けられ、アレンは一歩後ずさった。

「隠してたの？」
「いえ、別にそういうわけじゃ・・・」

「しかし炎が出てるということは、そういうことであるよな？」
「たまたま出たとか・・・」
「炎は燃やすか癒すかの二つのみしか能力を発揮しておらんが？」
「でも、あの、その・・・」
「アレン、もう諦めろさー」

うっ、と口篭り、恨みまがしげに左腕を包む炎を睨めつめた。
確かにこの炎のおかげで、さっきまで感じていた痛みはひいていった。
渦巻く炎の優しい癒しは、コムイの施す治療とは１８０℃どころか３６０℃も違う。
それは嬉しい。すっごく嬉しい。
こんな時でなければ、泣いて感謝したってよかったのに。

「でもさ、左腕を治してくれるんなら、何で俺たちの怪我も治してくれないんだろうな？クロちゃんの腕も治してくれてもいいだろうに」
「それはそっちの傷の方は治りかけてるし、腕の方は炎が癒すことはできても再生はできないからだ」

背後からの突然の声に、アレンは距離をとって身構えた。
そこには見慣れぬ服装をした茶髪の少年がいた。

「・・・お前、何者さ？」

ラビが問いかける。
その右手はいつでも出せるように槌を握っている。

「何者？それって俺の名前のこと？それとも俺自身のこと？」
「ふざけないで！」

「ふざけてない。至極当然のことを訊いたまでだ」
落ち着けよ、と少年はひらひらと手を振る。
「で、どっち？」
「そんなことときまっておろう。後者じゃ」
ブックマンの返答に、少年はふむ、と顎に指を当てる。
「俺自身が何者か・・・とりあえず、この奇怪の関係者とだけ言っとく。ていうか、原因？」
どんな返答がくるのかと聞いていたら、少年はさらっととんでもないことを言ってのけた。
驚愕の表情で見つめる一同を少年はクスクスと笑う。
「話続けていいか？」
「・・・どうぞ」
「あは、嬉しいな。信じてくれるんだ」
「少なくとも、あなたはＡＫＵＭＡではありませんからね」
アレンの言葉に少年は小首を傾げた。
聞き間違いでなければ、彼は推測ではなく、断定を口にしなかったか。
「何でそんなことわかんの？」
「・・・僕の左目は、ＡＫＵＭＡに内蔵された魂が見えるんです」
「・・・」
笑い顔が一変して、少年は悲しそうに顔を歪めた。

「そうか・・・悪かったな」
「何がですか？」
少年はただ笑って返した。
「話の続き、しろさ」
「おお、怖い怖い。俺の好きな色したオニイサンは短気みたいだ」
「おにいさん言うなさ。お前が言うと、からかわれてるように聞こえる」
「正にその通り」
「このヤロッ・・・！」
ラビの反応に少年は声を上げて笑う。
怒られた子どものようにアレンたちから一歩距離を置き、アレンの燃えている腕を指差す。
「その炎、イノセンスの仕業。よかったな、アタリで」
「あなたは何？」
「だから、この怪奇の原因」
「適合者であるか？」
「そうとも言えるし、そうとも言えない」
「じゃあ、お前がイノセンスか？」
「その質問についてはおもいっきり否定させてもらうぜ！」
「では何だ？」
少年は胸に手を当てて、お辞儀をした。
「俺は神原拓也。この怪奇を起こすイノセンス適合者であるフレイ・ゴッドフィールドの魂さ！」

フレイ・ゴッドフィールド

「・・・・・・・・・・・・・・・は？」

たっぷりの時間を掛けて、やっと搾り出された一文字。

少年――拓也と名乗った彼はしばらく黙っていたが、耐えられなくなったのかとうとう腹を抱えて笑い出した。

「そうだよな！普通はそういう反応するよな！」

「・・・ふざけてます？」

あまりにもおかしそうに笑う拓也に、アレンは顔を顰めて尋ねた。

すると、拓也は大声で笑うのを止め、アレンたちを見つめて微笑んだ。

彼からは、先程までのからかう子どものような雰囲気は消えている。

「ふざけてない。俺は本当のことしか言ってない。俺は神原拓也で、フレイ・ゴッドフィールドの魂だ」

「・・・お前がフレイ・ゴッドフィールドの魂だとして、何で神原拓也と名乗るんさ？」

ラビの問い掛けに、拓也は嗤うように口角を持ち上げた。

「輪廻転生って知ってる？」

「知ってるさ。死んであの世に還った霊魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わってくることだろ？――まさか・・・」

目を見開いて見つめてくる一同に拓也は笑って口元に人差し指を当てた。

「俺が今から話すことを黙って聞くなら、イノセンスのとこまで案内してやるよ」

別に拒否してもいい。
でも入り組んだこの森の中を探すのは手間と時間がかかるし、なにより見つからないと思うぜ。
イノセンスはエクソシスト(おまえら)に見つからないために、擬態してるからな。

「擬態？」
「そ、擬態」

さあ、どうする、と拓也は問いかける。
どうするも何も、答えなど一つしかない。
拓也の言った通り、この森はひどく入り組んでいるし、見つからないために擬態しているとなると、ここは唯一在り処を知っているだろう拓也に従うしかない。
たとえそれが罠だとしても。

「あ、別に警戒心まで解けって言ってるわけじゃないから。いつでも武器は出せるようにはしてていいから。白髪のおにいさん以外」
「何でですか！？」
「あはは、何のための炎だと思ってんだこのヤロウ」

思わず大きな声で問い返したアレンに拓也は笑顔で返した。
気のせいでなければ、その額にはわずかに青筋が浮かんでいるように見える。
所謂、怒りマークというヤツだ。

「その炎が消えるか、イノセンスを見つけるまで、白髪のおにいさんはイノセンスを発動しちゃダメだぜ？もし破ったら、この森の中一人で迷わしてやる」

ま、発動する必要はないだろうけど、と言った拓也の言葉は残念ながら顔を真っ青にしているアレンには届かなかったようだ。
アレンは自他共に認める――ただし本人は認めてはいるが人前では素直でない――方向音痴だ。
こんな入り組んだ森に一人残されたら、彼は間違いなく帰ってこれなくなる。
それも長い間。あるいは一生なんてことも。

「わ、わかりました・・・」
「やけに素直だな。拒否るかと思ったのに。それに顔青いぜ？」
「気のせいです！！」
「？そうか」

拓也は訝しげに首を傾げたが、それ以上は追求しなかった。
気遣ったのか、どうでもいいのか、原因を知っていて笑うのを堪えて結局アレンに肘打ちをくらわされたラビを見てしなかったからなのかは、不明だが。

「で、決まった？」
「決めるも何も・・・選択肢なんて一つしかねえじゃねェか」
「意思確認は一応しとこうと思ってさ。んじゃ、ついてくる、でいいんだよな」
「当然よ」
「オーケーオーケー。それじゃあ、レッツゴー！」

拓也はあっさりと背を向けて森の奥へと進んでいく。

「・・・無防備」

その背目掛けて、自分たちが攻撃を仕掛けるとは思わないのだろうか。

それはないはずだ。

少なくともあの子どもは、戦が何かを知っている。

それは先の言動で彼が証明していることだ。

「信用してるとでも言いたいんさ？」

あるいは、それすらも罠か。

拓也は歩きながら顔だけを振り向かせ、笑った。

「どちらでも」

その笑みも声も、まるで嘲笑っているような気がして、ラビは顔を顰めた。

すると、拓也は目を瞬かせて、おもしろいものを見つけたように笑う。

「そういえばさ、お宅ら名前は？まさか俺にだけ名乗らせる気じゃないだろうな。せめて名を名乗るぐらいの礼は守ってくれてもいいだろ？」

まるで話題を逸らすように言ったセリフに、そういえばと、顔を見合わせる。

「アレン・ウォーカーです」

「リナリー・リーよ」

「アレイスター・クロウリー3世である」
「儂に名は無い。ブックマンと呼べ」
「俺はこのじじいの跡継ぎのラビだ」

ブックマンの名に、拓也は口笛を吹いた。

「へぇ～、あんたブックマンなんだ。へぇ～道理で」
「・・・なんなんさ」
「別に♪」

ブックマンを見、次いでラビを見遣りながら拓也はニヤニヤと笑う。
イヤな笑みだと、睨みつければ、更に笑みが深まる。

「・・・お主、ブックマン(わしら)を知っておるのか？」
「さあ？」

拓也はニヤニヤと笑ってはぐらかす。
ここは殴っていいのではないかと、ホルスターに納めている己の武器を握りしめれば、拓也はそれに気付いたのか少し距離を置いた。

「あの・・・拓也とやら・・・」
「ん？何？クロウリー」
「話とやらはまだであるか？」
「おっと、そうだったな」

てへへと頭を掻く拓也に視線が突き刺さる。
忘れてたなこいつ。

「今からするのは、おもしろくも何ともない話だけどな。・・・もう滅んだ、名も無き村で、フレイ・ゴッドフィールドは生まれた」

「どうして・・・」
「ＡＫＵＭＡ。てか、黙る約束だろ？それともやっぱり俺の案内は要らない？」
振り返った拓也の言葉にブックマン以外の皆が口を手で覆って首を横に振った。
素直だなぁ、と拓也は微笑んで話を続ける。
「俺たち(あいつら)は、ただ知っていただけのガキだったのさ。ＡＫＵＭＡがどんなものか、本当には知りもしなかった。あの日までではな」
空を見上げた拓也の脳裏に浮かぶのは、遥か遠くの過去(おもいで)。
命ある限り続くと思っていた、小さくも幸せな生活。
「村にはさ、ある文献があったんだ。ＡＫＵＭＡやエクソシストや黒の教団、果てにはノアやブックマンのことも書かれてた」
背後で彼らの気配が揺らいだのを感じた。
痛いぐらい視線が伝わってくるが、拓也は敢えてそれを無視する。
「つっても、書かれてたのは大まかなことだけ。細部までは書かれてなかった」
機械と魂と悲劇から創られるＡＫＵＭＡ。
ＡＫＵＭＡの生みの親の千年伯爵。
人類最古の使徒の遺伝子と記憶を受け継ぐノア。
対ＡＫＵＭＡ軍事機関の黒の教団。
ＡＫＵＭＡを破壊する神の使徒(エクソシスト)。
歴史の傍観者ブックマン。

「何でそんなのが村にあったのかは知らねぇ。でもその文献の内容は、村の奴らは物心ついた頃から聞かされてきたものだ。だから、イノセンスを持ってたあいつらは、遠ざけられてたよ・・・」

大人たちは畏怖の対象として、子どもたちは嫌悪の対象としてあいつらを見てた。

あの寂しげな、どこか諦めた瞳は、今でもはっきりと憶えている。

「なぁ、あっきから言ってるあいつらって誰さ?」

「だから黙る約束。心配しなくても、その内会えるさ。それより続き話すぞ」

あまり外とは交流を持たない、閉鎖的な村。

知っているのは、村のことと村を囲む森のことと文献のことだけ。

外のことを知りたいとは思っていたけれど、不思議と、そこから抜け出そうとは思わなかった。

「ある日だ。村に、森に迷った男が来た。俺(フレイ)たちは、そいつを見て、寒気を感じた。その時は俺(フレイ)にはわからなかったけど、イノセンスが、俺(フレイ)たちに危機を知らせたんだな。俺(フレイ)たちは村の大人たちに言ったよ。喚くようにさ、あいつを追い出せって。それが、いけなかったんだろうな・・・」

そいつは嗤って、皮を脱いだ。

上半身が人間で、下半身が蛇のような、巨大な醜い怪物。

そいつが手を上げると、森の中から次々と、醜い球体が出てきた。

無常なる合図、放たれる弾丸。

溢れる悲鳴と、血と、消えいく屍。

逃げながら途中で気付いた。

そいつらの姿は、話に聞いていたＡＫＵＭＡと同じだと。

「そいつらは探していた。村にあった文献を。何で探していたのかは、知らねぇけど・・・伯爵にとって、あの文献は鬱陶しかったのかもな」

決して表に出ることは無い、出してはいけない、神の使徒同士の戦い。

伯爵は、ＡＫＵＭＡのことが明るみに出ることを嫌って、ＡＫＵＭＡに村を襲わせたのかもしれない。

「ＡＫＵＭＡどもは、手当たり次第に村人を殺していった。夥しいほどの血と崩れていく人に吐きそうになりながら俺（フレイ）は逃げ回った」

森の中を走って走って、走り続けた。

それでも逃げきれずに追いつかれ、追い込まれた。

向けられる銃口、死の恐怖。

声はカケラも出ず、ただ助けてと心の内で悲鳴を上げる。

「その時だよ、俺（フレイ）のイノセンスが発動したのは」

俺（フレイ）の危機にイノセンスは反応し、目の前でＡＫＵＭＡを灰も残らず燃やした。

何が起きたのかわからず、俺（フレイ）はその場で立ち竦んだ。

やっと体が動いて、村に戻った時には、人も文献も消し去られた後だった。

その時俺（フレイ）の胸に宿ったのは、言葉では言い表せないドス黒い激情。

その感情の矛先は、ＡＫＵＭＡに対してなのか、エクソシストに対してなのか、使い方を知らぬとはいえイノセンスを持っていたあいつらに対してか、自分の危機になるまで発動しなかったイノセンスに対してなのか、無力な自分自身だったのか。

「見っともなく大声出して泣いた。何で助けてくれなかった、何で殺した、って喚き散らした。ほんと、ガキ・・・」

ハッ、と拓也は自嘲するかのように吐き捨てた。
アレンたちは、そんな拓也に何と言っていいのかわからず、顔を見合わせる。
仕方なかった、知らなかったのだ、君のせいじゃない。
これらの言葉は、彼にとったら体のいい言い訳にしか聞こえないだろう。
それに、例えイノセンスの発動が早かったとしても、彼に何ができただろう。
扱いのわからない道具を操ることは容易いことではない。
それに、今更そんなこと言ったところで、起こった事実は変わらない。
そしてそれを一番理解しているのは、彼自身だ。

「今更な話だけどな・・・その時は泣き喚くぐらいしかできなかったんだよ。どれぐらいそうしてたか知らねぇけど、喚き疲れた俺はその場で倒れたよ。このまま死ぬのかと思った。その時俺(フレイ)は何を思ったと思う？」

『死にたくない』

「呆れたもんだぜ。家族も友達も殺されて、まだ生きたいと望んだんだ」

俺(フレイ)は村を離れた。
行き場所なんて無かったけど、村にはもう戻らないと誓った。
黒の教団に行く気は無かった。

フレイも俺も、縛られるのが大嫌いだから。
たったそれだけの理由だったけど、とても大事なことだったのだ。

「生きるために盗みもしたし騙しもした。時にはＡＫＵＭＡも壊した。教団やＡＫＵＭＡに見つからないように・・・俺(フレイ)は逃げ続けた。もしかしたらあいつらに会えるかもって思った」

雪の振る日だった。
ある町でＡＫＵＭＡを見つけた俺(フレイ)は、その内の一体を壊して、街に被害が出ないように森に逃げた。
そこでＡＫＵＭＡを全部壊したと思ったけど、体力も精神も限界だった俺(フレイ)は、ＡＫＵＭＡの最期の一発をくらった。
襲い掛かる死の感触に、やっとか、って思った。
生きたいと望みながらも俺(フレイ)は、死に焦がれていたんだ。

「その後死んだフレイ・ゴッドフィールドの魂は天へ召され、永き時を廻り、記憶を失くし、未来に蘇った。それがこの俺、神原拓也ってわけさ。だけど・・・」

拓也は一本の大樹に片手をつき、爪を立てた。
そんなことをしても大樹には傷一つつかないことは解っていても、拓也は憎む気持ちを抑えられなかった。

「・・・イノセンスはこの中にある」
「ここに・・・」

拓也の言葉に、皆は彼がもたれかかっている大樹を見上げた。
木を隠すなら森の中、とはよく言ったものだ。
確かに大樹(こんなの)に擬態されていたら、見つけるのは至難の業だ。
彼の言うことが本当だったらとしての話だが。

「で、どうやって取りだすんさ？壊せばいいんさ？」
発動していない槌を取り出したラビに、拓也は笑って首を横に振る。
「その必要は全くねぇよ。ただ触れてくれるだけでいいんだ、イノセンスでな」
拓也は大樹から身を離して、アレンに歩み寄り、炎の消えている左手を指差した。
「槌とかだとロマン無いからさ、アレンが左手で触れてくんない？」
「えっ、でも・・・」
「大丈夫大丈夫。触ってアレンを燃やすなんてことはないから」
早く早くと、拓也は大樹を指差す。
アレンは困ったように眉を下げたが、笑って急かす拓也に折れて大樹に近付く。
アレンの後をついていく拓也はにこにこと笑っている。
だがその眼は、氷のように冷たいものだった。
「じゃ、触りますね」
「どうぞ」
振り返ったアレンに拓也は俯かして言う。
アレンはその動作に小首を傾げた。
もしかして、本当は触れてはいけないのではないのだろうかと、動きを止めてしまう。
「アレン・・・」

縋るような声に、ハッとしてアレンは振り返った。
拓也は俯いたまま、震える唇で告げる。

「お願い・・・」

彼の顔は、笑っていた。
泣きそうな目で、なのに秘められているのは何も無い。

「・・・」

アレンは大樹に向き直り、イノセンスの宿った左手で触れた。
途端、大樹は閃光を放ち、ぼろぼろと崩れだした。
急いでその場から離れるアレンに向けて、拓也は微笑んだ。
その輪郭はひどく朧げだ。

「サンキュ。これでやっと・・・」

アレンの目の前で、拓也は光の粒子となって消えた。

喚ばれし魂　目覚めし肉体

ボロボロと崩れていく輝く木と共にするかのように消えた拓也。
その瞬間を見ていたアレンは、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「アレン！何してるんさ！！」

ラビの呼びかけに意識を戻したアレンは急いでそこから離れる。
戻ってきたアレンに、さっきまでいた少年の姿が無いことにラビは気付いて尋ねる。

「アレン、拓也は？」
「・・・消えました」
「え・・・？」
「消えたんです。僕が木に触れて光った途端、目の前で消えたんです！」

ヒュッと息を呑んだのは、果たして誰だったか。
木が閃光を放ったとき、眩しさに目を瞑ったラビたちは拓也が消えたところを見ていなかったのだ。
アレンは泣きそうな顔でラビたちを見る。

「僕・・・触らない方がよかったんでしょうか？そうすれば、拓也は消えずに・・・」
「アレン、お前のせいじゃないさ。アレンがやらなくても誰かが必ずやったことだし、それに、ここに案内したのも、イノセンスで触れって言ったのも、拓也自身さ」
「そうよアレン君」
「ですが・・・」

「小僧ども、そこまでだ。見ろ」

ブックマンの顎で示した先には、先程までの大樹はなくなり、代わりに根のようなものが張り巡らされていた。
皆、それぞれ顔を見合わせて、警戒を滲ませながら根に近付く。
張り巡らされた根に護られるようにして、そこにいたのは、一人の青年だった。
それも、ひどく見覚えのある顔だ。

「・・・拓也？」

アレンは疑問を滲ませて名前を口にした。
困惑げに眉を寄せ、同意を求めるように一同を見る。
彼らもまた、アレンと同じように困惑と疑問を浮かべていた。
風に揺られる茶色の髪も、眠っている顔も神原(かれ)拓也と同じだ。
横たわる彼が少年であれば、アレンたちはここまで困惑はしなかっただろう。
だが目の前で横たわっているのはどう見ても１６，７歳の青年だ。

「う、うん・・・」

その時だ、青年が目を開けたのは。
思わず飛び退き警戒するアレンたちに構うことなく、青年は寝ぼけた目で周りを見回す。
寝ぼけているのか、その動きは鈍い。
少し動くたびにゴキゴキと音が鳴る。
そして、アレンたちを瞳に映すと、ニッと笑った。

「おはよう」

見知らぬ青年に挨拶されて、アレンたちは困惑すると同時に警戒を強める。
青年は不思議そうに目をぱちぱちと瞬かせ、めんどくさそうに頭を掻いた。

「説明しなかったこっちが悪りぃんだろうけど、ここまで警戒されるとは・・・」

青年は溜息を吐いてアレンたちに向き直り、再度笑う。

「ほんのちょっとの間消えただけでもう忘れた？神原拓也だよ」
「「「「「・・・・・・・・・え？」」」」」
「だから、俺は神原拓也だって言ってんの！！」
「「「「「・・・・・・・・・ええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！？」」」」」

森中に、アレンたちの叫びがこだます。
拓也はこうなることを予想してたのか、しっかりと両耳を押さえていた。

「う、嘘！絶対嘘です！！だってさっきまでいた彼は、どう考えても１０歳前後ぐらいで・・・！」
「正確に言うと１１歳。てか、この顔見ても疑うのかよ？そっくりだろ？」
「でもでも！そんな急成長するなんてありえないさ！！」
「お前ブックマンの後継者だよな？あん時の俺は魂だって言ったよな？成長も何もねえっつの」
「・・・どういう意味さ」
「俺は、心は神原拓也さ。でもこの身体は、フレイ・ゴッドフィールドのものだ」

疑わしげに見つめてくるクロス部隊に、拓也は困ったように笑う。
「本当なんだけど？」
「そう簡単に信じられませんよ。今までの話が全部真実だとして、じゃあどうしてフレイ・ゴッドフィールドの身体が存在しているんですか？ＡＫＵＭＡに撃たれたはずでしょ？」
「どうして！？決まってるだろそんなの！イノセンスのせいさ！！」
拓也の叫びにアレンたちはビクリと肩を揺らした。
ただ一人、ブックマンだけが、冷徹なる眼で拓也を見つめる。
「喚(よ)ばれたんだよ！！またＡＫＵＭＡと戦わせるために！フレイ・ゴッドフィールドの身体を朽ちさせず、魂をこっちに連れてくるために！拓也(オレ)の身体は灰も残らず燃やされ、現世で俺は殺された！！身勝手な神同士の戦いのために！！イノセンスのせいでなッ！！！」
耳を塞ぎたくなるような、悲痛な叫び。
リナリーは彼が語ったあまりの内容に、耐え切れず涙を流しだした。
アレンとクロウリーとラビは息を呑んだまま立ち尽くしている。
ブックマンは、感情を滲ませぬ傍観者の瞳でもって拓也を映していた。
秘められている冷たさと、更に奥に秘められた情に、拓也は泣きたそうな目で笑った。
「あんたはすごいな。俺だったら無理・・・」
「・・・」
無言を貫くブックマンに、拓也はクスリと笑う。
そして、沈んだ面持ちのアレンたちを視線で見回して、バレないよ

うに小さく溜息を吐いた後、明るくにっこりと笑った。

「あのさ、俺今すっげー重大なことに気付いたんだけど」
「・・・何ですか？」
「いや、さっきの話とは全く関係なくて悪いんですけど・・・動けない」
「・・・は？」
「だから動けない。死後硬直ってやつ？冗談抜きで体動かないんだよ。つらいから誰か起こして」

急な話題変換にアレンたちはついてこれなくなる。
言うにしたってタイミングというものがあるのではないだろうか、と思った直後に、違うなと、思い直した。
こんなタイミングだからこそ、彼は切り出したのだろう。
お前たちが気にするなと、暗に示すために。
まだたった１１歳の子どもに慰められている自分たちの情けなさに、アレンたちの心の内に苦いものが広がる。

「なあなあ、早く起こしてくれよ！ずっとこのままなのはイヤだぜ、俺」
「・・・・・・このまま、放って置いて行くのも、おもしろそうですね」
「・・・あり、かもな」
「ざけんな！」

どうやら動けないのは本当らしい。
ギャーギャーと文句を言う彼は、口は動いていても体の方は彼の感情に反応するもほんの僅かしか動いていない。

「それじゃあ仕方ないけど、誰かあいつを背負ってやらにゃいけな

いみたいさね」
「誰がやります？リナリーは女性ですし、クロウリーは片腕ですし、ブックマンはご老体ですから外すとして・・・」
「いや、ジジイは外さんでもい・・・痛ってえ！！」
「馬鹿者が。少しは小僧を見習って労わらんかい」
「こんな元気なジジイをどう労われって言うんさ！！」
「お、落ち着くであるラビ！」
「俺、クロウリーがいい」

会話に入ってきた拓也に一同は彼を見る。
え、何で？それって本気で言ってる？てか片腕無いんですけど、とその目は言っている。
拓也は気にせず笑って先程の言葉を繰り返す。

「クロウリーがいい」
「何で？」
「背が一番高いから」
「クロウリー、片腕無いんだけど・・・」
「片方あればおぶるくらいできるだろ」
「だったら僕が・・・」
「治療したばっか。それに―フレイ・ゴッドフィールド《オレ》より身長低い」

ピキッ、とアレンの額に青筋がたったが、拓也は気にしなかった。

「だったら俺が・・・」
「却下」
「何で！」
「低い」
「うるせェッ！！」

ラビは涙目になったが、やっぱり拓也は気にしなかった。

「頼むよクロウリー。お前しかいないんだよぉ」
「し、しかし・・・」
「僕らの存在は無視ですかコンニャロウ・・・」
「おわっ！アレンがちょっと黒くなったさ！」
「白が黒？灰色だな。アレンの瞳の色」
「おしい！アレンのは銀灰色さ」
「銀灰色？難しい色の名前出すなさ！」
「真似するなさ！」
「真似じゃねぇ！移ったんさ！あ、まただ」
「いい加減に・・・！」

言葉をとぎらせたアレンの左眼から、スコープのようなものが現れる。
きょとんと、疑問だけをのせた目でアレンを見つめる拓也を置いて、ラビたちはすぐに戦闘態勢に入った。

「数は？」
「六体です」
「一人一体・・・は無理か」
「拓也君は動けないものね」
「早めに倒せばいいだけの話だ」
「来ます！！」

アレンの言葉と共に、ＡＫＵＭＡたちが飛び出してきた。
そのどれもが独特の形態（かたち）を持った、Ｌｖ．２。
そこでようやく拓也は事態を飲み込めた。

≪見つけたぞ！≫
≪イノセンス寄越せー！≫
「誰が渡すもんですか！」
「渡すも何も、既に適合者がいるけどな」
「歯が、疼く・・・」
「やれやれ、老体は労わってもらいたいものじゃな」
「いくわよ！」
「「「「「イノセンス、発動！」」」」」

イノセンスをその身に宿す寄生型のアレンの左腕は銃型に変形し、クロウリーは恐ろしい形相へと変わり、イノセンスを物に宿す装備型は、それぞれの武器を持ってＡＫＵＭＡへと突っ込んでいく。
穏やかだった森は、瞬く間に戦場へと変わり、木は折られ、草花は燃やされ、大地は抉られ毒されていく。
一、二、三と、ＡＫＵＭＡが次々に壊されていく。
拓也は動けぬ体をもどかしく思いながら彼らの戦い見る。
五体目が破壊された時、最後の一体が動けぬ拓也に目をつけて、爆発に乗じて拓也へと腕を伸ばした。

「しまった！」
「拓也！」

ＡＫＵＭＡは捕らえた拓也をこれ見よがしに掲げて、もう片方の手を拓也の首に回す。

≪動くなよ。動けばコイツの首がポッキリだぜ≫
「どうせ殺すくせに」
≪黙れ！早くイノセンスの発動を止めろ！！≫

首に回る手の力が強まり、拓也は顔を歪める。

アレンたちは悔しげに、各々武器を納める。
それを見て笑みを浮かべたＡＫＵＭＡを拓也は嘲笑う。

「馬っ鹿じゃねえの？」
≪何だと！？≫
「動き抑えたくらいで、お前が俺に勝てると思ってんの？だとしたらホントに馬鹿だな！」
≪お前、状況を分かってるのか？このまま首を胴とおさらばさせてもいいんだぞ？≫
「そりゃ怖えぇ！じゃあ・・・殺(ヤ)られる前に壊(ヤら)さなきゃな！」

瞬間、ＡＫＵＭＡから炎が吹き上がる。
何が起きたのか分からず、悲鳴を上げて燃え上がるＡＫＵＭＡをアレンたちは呆然と見つめる。
崩れ落ちるＡＫＵＭＡの手から解放された拓也は地面に降り立つ。
が、起きたばかりの体に支える力は無く、拓也は地面に顔面を盛大にぶつけた。

「うわっ、痛そぅ」
「つか格好つかねぇ」
「うるせぇ！いいから起こせよ！！」

照れ隠しなのか、大声で体を起こすよう促す拓也に、皆苦笑し、仕方なさそうにクロウリーが片腕を掴んで持ち上げた。
軽々と自分を持ち上げたクロウリーに拓也はぱちぱちと目を瞬かせる。

「あれ？クロウリーって意外と力持ち？」
「意外ととは何だ。失礼な餓鬼だ。礼も言えんのか？」
「あ、いえ、どうもありがとう・・・てか、なんか性格変わってね

？」
「クロちゃんはイノセンス発動すると、すっげぇ頼もしくなるんさ」
「へぇ・・・片腕復活してるな」
「ＡＫＵＭＡの血を飲んだからな」
「すげぇ」

ヒーローみたいだな、と拓也は笑う。
クロウリーは目を見開いて、じっと拓也を凝視する。

「？何？」
「いや・・・」

クロウリーはフッと微笑を浮かべ、ＡＫＵＭＡがいた場所を顎でしゃくる。

「ところで、あれはお前がやったのか？」
「そう！俺のイノセンスでやった」
「へぇ～、お前寄生型？」

拓也はにこりと笑いかけ、ゆっくりと、手をラビに向けた。
首を傾げるラビに向かって、拓也の服の袖から出てきた紅い鎖が巻きつき、ラビを持ち上げる。

「どひゃあああああああああ！」
「ラビッ！」
「あはは、これが俺のイノセンス、『炎龍（えんりゅう）』だよ」
「分かったから下ろしてーっ！」
「あはは」

拓也は下ろすどころかラビを速度をつけて持ち上げていく。

やがて木の上まで持ち上げられ、そこで鎖は動きを止めた。
ラビは目を瞬かせ、ぐるりと景色を見回す。
自分達がいる所を中心に森が広がっていて、その向こうに街が見える。
どうやらここが森の中心地らしい。

「ラビー！ここの景色はどうだー？」
「悪くねえさー！」
「そっかー！じゃあ下ろすなー！」

さっきとは違い、鎖はゆっくりとラビを下ろしていく。
そしてようやく地に足をつけることができたが、鎖は巻かれたままだ。
ラビはキョトンとして拓也を見る。
その視線の意図を理解している拓也は、笑うだけだ。

「・・・ラビ」
「何さ、アレン」
「燃えてますよ」
「何が？」
「ラビが」
「へっ！？」

ラビが顔を青くさせたと同時に拓也は笑みを浮かべ、炎がラビを包んだ。
ラビは悲鳴を上げたが、予想していた痛みも熱も感じないことに疑問を感じ、次いで先程のアレンの左腕のことを思い出してすぐに落ち着いた。
熱いわけがない。
これは傷つけるための炎（モノ）ものではなく、癒すための炎（モノ）だ。

「先に言えさ拓也！ビックリしたじゃねえか！！」
「イノセンス訊いてきたのはラビだろ？ついでに治療しようと思って」
「口で言え！てか他のやつ等にもしろよ！」
「とっくにやってもらってるよ、ラビ」

にこりと笑うリナリーの足には、ラビと同じように鎖が巻き付いている。

「枝か何かに引っかかったんだろ。大した傷じゃないけど、起こしてくれたから、特別！」

クロウリーに背負われながら拓也は言う。
傷が完全に塞がると、鎖は役目を終えたとばかりに消えた。

「ありがとう、拓也」
「サンキュ」
「どういたしまして」
「任務は済んだ。ここから出よう」
「そうですね。拓也のことも報告しないと」
「あ、それなんだけどさ」

教団に報告すると言ったアレンに、拓也はにっこりと笑って言う。

「俺、教団に入るつもり、無えよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7633x/

神に殺された異使徒

2011年12月1日23時48分発行